



雜



録

幼稚園案内(承前)

東 基 吉

保育の方便

幼稚園保育の要旨は、大略前號記述した通り、次に、此要旨を遂げて、よく幼稚園保育をして教育全體の目的に適合せしめんが爲めに取る所の方便は何かといふ問題を解くのが順序だと思ふ。尤も此方便といふ語には、いろいろの意味が含まれる、例令ば、園の設計なども其一と見られるが、

こゝで方便といふのは、専ら幼児を保育する爲めに、保姆の取る所の手段をいふのである。

幼児保育の手段として、遊戯を利用するに至つたのはどうしてもフロエベル氏である。遊戯の教育上の價値を認めたる人は、勿論前々々の教育者に、幾人もあつたには違ないが、然し實際遊戯を用ひて幼児を教育する計劃を系統立て、且つ之を實行したのは、フロエベル氏が始めである。

そこで、こゝでは敢て遊戯の理論や効能を説くではないが、たい此時代の幼児保育の方便は一切遊戯を用ふるのだといふことをいふのである。つまり、幼稚園教育の性質は、外部から多く與へてやるのではなくつて、フロエベル氏の言つた様に、幼児の自己活動力を働かせて内部に存在して居る諸力の萌芽を正當に發達せしめるのであつて

遊戯は此自己活動力ヲ満足せしめる殆んど唯一の
 方便で之で以て、幼稚園主要の目的たる身體の鍛
 練を得させるは勿論いろ／＼な心力の發達の資に
 もなり、且つ道徳上い、習慣も與へる便にもなる
 ののである。

幼稚園の保育は最初から、遊戯が其主要の方便
 として定まつたものであるに、とかく世間の親た
 ちは、近慾ばかりねらつて幼稚園で何かを學ばせ
 様／＼と望み、又幼稚園の方でも、其望に應じて
 読み書き算術を教へたり、夫でなくつても、無暗
 と、智識を外部から注入することばかり考へて、
 此主要の方便たる遊戯をどう利用すればよいかと
 いふことを余り考へないといふのはよくない事だ
 と思ふ。

勿論、幼兒は一体遊戯ばかりするものでない、

いろ／＼の活動をやつて居る、例令は談話をした
 り聞いたり、歌を唱つたり、其他いろ／＼の仕事
 をして居るのは、誰でも知つて居る、だから、幼
 稚園でも、たい遊戯ばかりやるのではない、遊戯
 と名のつく事の外に、談話といふものを語て聞か
 せたり又咄させたりもし、唱歌も唱はせる、其他
 細工もの、様なこともやらせる、之等も無論、保
 育の方便として用ふるものであるが、然し之等の
 方便を用ふる其の精神といふものは、遊戯にある
 のであつて唱歌でも、細工などでも、勤勞といふ
 形になつては行かないのである。なぜかといふに
 此時分の幼兒の心身諸力は、眞面目に勤勞を課せ
 られるには尙餘りに微弱なからである。

(つづく)

鹽津みやげ(その二)

和歌子

●七月のある日、昨日鹽津に着いたをばさんは、朝から荷物を解き出して、まづおみやげをズラリ並べてそれ／＼に渡す。千代子(六年六ヶ月)と英夫(四年二ヶ月)は踊つて喜ぶといふ賑ひ。やがて此二兒に清子(七年九ヶ月)文子(三年二ヶ月)きみ子(一年六ヶ月)を加へて五兒を引連れて、濱近き小高い地にある神社に遊びに行く、社内には處々はげそうになつた昔の繪や、當世の石版摺などが額になつて掲げられてある、中には畏くも、貴顯御騎馬の御尊影、和蘭の女皇陛下の御肖像の石版摺までも掲げ奉つてある。さて何時も此社に遊ぶ千代子は、之等の額に付て町重に得意に説明をするので、昔の祭禮の行列の畫を指して、「コレハ葬

式」などと言つて呉れる、一体をばさんは鹽津に來たのは今度をはじめたので、千代子は進んで、道案内其他諸事説明の任に當る。こゝは豆腐屋、こゝは網屋、こゝは八百屋といふ事までも、其家々の前に立ち止まつて教へて呉れる。社に居る間、千代子の友であるおとみサン花チャンの二兒が加はり、きみ子を膝に、六兒を前にして、ジョーシヌと鼠の話をかかせる。石壇に腰掛けた兒達は、目を丸くして耳を傾けて居る無心さ！、やがて雀や蛙の歌を皆一緒にうたふ。幾度となく石壇を上つたり下りたりする。

●又ある日、毎日の定のやうに大人と子供と六人連で岡のあなたの濱に海水浴に行く。毎日わざわざ海水浴に出かけるのは全村で吾等の一族ばかり従て此濱はまるで獨占のありがたさ。静かさ。見

渡せば淡路島遙か向に低く青く。和歌の浦は目近く前に控えて白沙青松呼ば、答へさうな景色の好い所なので。大人の心も廣々する。兒等の活氣は層一層でチャブ〜と跳ね廻る。バタ〜と泳ぐ浪に倒され潮を被つてはキヤーキヤー喜ぶ。「ラバサンヲヨグノヘタヤ〜」「ア、アンナ遠イトコヘヲヨイテイタ」など、口々に言ふ子供のを耳にしながら、大人もそれ〜泳いだり浴したりして居る少時すると子供の爲に海水中に立てた赤旗を抱へて大人が皆上陸したので、子供も一緒に來て砂遊びをはじめ、石ころも貝も御望次第にころがつて居るので、之等を集めては一生懸命に山、池、川、海、庭、橋、などを作り、非常な興味と熱心をもつて居る。大人も此工事を手傳つたり顧問になつたり、高い處の草花をとつて

來る役になつたりして居る。大小六人が砂遊びに餘念もない外には、此濱には一人一人の影も見えぬ六人の聲の外には静に寄せる浪の音ばかり、立つて居るものは山ばかり、涼しい濱風は濡れた海水浴衣にこゝろもちよくわたる。實に浮世の外である。此平和な時平和な處に一事件が起つた。といふのは外でもない。清子のこしらへた山の上に、をばさんが「コレハ人ナンデスヨ」と言ひながら小石を歩かせた處が千代子「コンドハアタシ上ツテ見ル」と言ふや否正眞に自分の足をかけたのでサーたまらぬ山も谷も木もメチャ〜にこわれ、さながら山崩の体なりで、清子は大に腹を立て千代子が故意とこわしたと見たので、それこそアナヤといふ間もなく、直ちに千代子の山を踏みにじつた。こうされて見ると千代子も怒るといふ

ざはぎ、英夫一兒は局外中立、アツケにとられてつゝ立つて居る。今のは千代子がをばさんのまねを實際にしたのでこわさうと思つたのではなかつた云々、とをばさんが證言するやら、訓へるやらで、事落着、忽ち雨晴れ風收まつた体で、双方元々の笑顔にかへり、またセツセと修繕するやら新に山を築くやらの大工事。家に歸つてけふの此騒動を語ると家内中大笑をする。當局の清子と千代子も、他兒の事かなんかのやうに笑つて居つた。

●又ある日。をばさんは清子、千代子、英夫の三兒を連れて買物に行つた。まづ海水浴をする時の爲に麥藁帽を買つた處が千代子は、其をばさん自身のであるといふ事を聞いて、「アレマー女の大キナ人ハシヤツポカブルモンヤナイワ」と頻に笑つ

居つた、次に下駄店に入ると、二女兒は熱心に「アレニシナー」「コレニシナー」と横合から擇んで居つたが、遂に或粗末なのに定めたのを見て「ソナノカイナ、アレニシナーエ」と店中で最も美はしく見えるのを指して居つた。さて主人が花緒をたてる間、英夫は例の目を圓くして注視して居つたが、でき上ると同時に「上手ヤナー」と感嘆した二女兒は店頭立つて遠慮會釋なく其邊にわる下駄雪駄の品評をはじめた。まづ「アレハエー」「コレハイカン」「アレコーテホシー」「アレキレーナ」よりはじめて、過去の履物に關する諸記憶を思ひ出して語り合つて居る。千代子の雪駄談がふもしろい。「アタシモーセンドセキダコーテイタ、イタワエー、ソレノシ表切テ裏木デノ、コナイシユー」ナランデアツタワエー、ホイタラチットマハ

イタラ、ボキツテラレタワエー」といかにも其時の惜しさを思ひ出したやうに、左の手の指を並べて見せる。板草履の形容なのである。歸途に木綿店に寄つたらば。又其店頭でも布の品試があつたさて色々の買物を一ツづゝ持たせてもらひ、家に歸つてからは又ズラリと並べて三兒で説明をする。

●をばさんヤ子供達の家は少し小高い處にあるのであるが、夕方ふみ子(三年二ヶ月)ハ海上を見て「アレオフネが這ウテマス」といふ。英夫は漁船の多いのを見て「ニンギヤカナヨ、博覽會ミタイナノシ」と、此春大坂に通れられて、博覽會でゾロゾロと同じ物の澤山並んであるのが、此小さい人の目にも心にも映じたと見える。

秋風荒む

や、

て

秋氣日々に加はりて身神頗る爽快、郊外秋色甚だ愛すべく燈火讀書亦親しむべし、柑橘黄ばんで醫師色を失すとはこれ古來の諺。されど此の好時節亦決して油斷すべきにあらず、百病の因て起る感冒は實に此の良風と共に吾人を襲ひつゝあり道路幾多の咳聲を聞く、大に注意すべきなり。今や序を以て聊か此病はつきて記する所あらんとす。

醫師ならぬ身の病を説く頗る御門違ひの感ありと雖も、吾人は只其の由來を尋ねんとするにありのみ。

我國古來感冒を風といふ、時候に障りたる意なり。風氣とも云ふ。又邪氣ともいふ之れ熱を發し

て嘸語謔言をなす様恰も邪鬼の所爲の如き故ならん、併せて風邪といひ今日普通に用ひらる。而して其の流行性のものは疫癘といふ、疫とは廣き意味にして説文には「民皆疾也」とあり。字林には

「病流行也」とあり癘は惡鬼を意味す。「鬼神爲三之疵厲」或は「疫役也、言有レ鬼行レ役也」と解す。古人の思想にては、惡鬼ありて障礙を爲すものなり

と思ひしならん、されば疫とは幾多流行傳染の病に通ずれども、世俗多く熱病を意味せしなり。古書に記せる二三を擧ぐれば

唯假初に風の心地と仰候ひて程なく空敷成給ひて候（謡曲柏崎）

さて八月の十日あまり六日にや秋霧にをかされさせ給ひてかくれまし〜ぬ（神皇正統記後醍醐帝崩御の段）

侍臣より惟風の心地にましませば頼てなぞり給ふべしと申せしかば帝

露の身を草の枕におきなから風にはよもと思ふはかなさ

と詠じ給ふ（吉野拾遺）

古來國史に疫病を記したるは、書記崇神天皇五年を始めとす、其後咳病流行せり。之は園太曆に

ある左大史小槻清隆天下病事あるに依り御祈を行はせられし勘文中の

文永元年七月上旬以來咳病流行を初めとす。續で庚永四年の咳病は頗る甚しかりしや、同書に記して曰く

九月十二日天晴、傳聞上皇院 御咳病興盛、明日長講堂供花始行延引……………凡 此間人々咳病

或有三殞レ命之輩……………是唐船歸朝之時有二此

事^二之由、世俗稱^レ之^一……………

是月京都嵯峨の天龍寺供養にて、第一回の天龍寺船元より歸國し、彼邦より咳病を傳へたるなり

同十九日野資明の書狀に

御咳氣如何様令^ニ聞給^一候哉、早可^ニ參承^一候
來廿七日御講御參事、敎光明日可^ニ參申入^一之由
申候、定而參候歟

とわれば、一周日を経て漸々御快くなられて、御講の日取も議せられたるならん。其の後十六年を経て延文五年の疾疫も雲井畏き邊まで上れり。近衛關日道嗣公の日記なる愚管記に

十月六日己丑、禁裏^{後光}、^{嚴帝}御上氣之由、日來風聞
此間煩敷御……………御喉邊成腫……………廿二日乙

巳、今日有二勅問^二事、御上氣未無^二御平癒^一之間、
年始公事不^レ可有^二出御^一……………

とあり、上氣ハ「ノボセグ」なるべし。此年康安と

改元せられたり。爾來或は咳病或は傷風或は三日病等の名にて其の流行を記載せり。疫病の事人命にかゝるを以て、往古よりの朝政に甚だ重んぜられしが、疫は邪鬼の所爲と思ふ時代なりし故、醫療よりは神佛の祈禱に最心を盡されたりき。

近時インフルエンザの我國に傳はりしは實に廿三年の春にあり。一時流行して後熄みしが其の十月の末頃又支那より傳へて頗る激烈を極めたりしと云ふ。

露

摩訶生

夏の日に中に玻璃製のコップに水を容れておくと
何時の間にか、コップの外側に水の粒が現はるゝ

之はコップの外側が非常に冷たくなつて居るのに其割合に外部の空氣は暖かくて従つて濕氣が多い。

それが冷たいコップの外側の面に觸るゝ、そこで其水分の幾分が露化したのである。

冬の晨、多人數一列車に來ると、知らぬ間に其客車の硝子窓の面が曇つて居る、之も割合に室内の空氣の暖く従つて濕氣が多い、それが冷たい窓硝子に觸れて其水分が滴化して露となつたのである。

之と同理で、晴れ渡れる靜なる夜には温熱放散の爲に空氣中の水分は先づ冷たい草木の葉に凝結して露となる、之は葉末の露の生成についての舊説であるが、實際は木の葉草の葉等の夜間の温度は外氣よりも暖かい位だ、だから外氣の水分が來つて葉面に凝結するのではなくて、葉面わたりの水

分が蒸發せんとして外氣の冷さの爲に據なく其處に露化したのだ、といふ説も起つて居る。

兎も角も空氣中に抱合する濕氣の量には、温度によりて一定の限りがある、其一定限に達して飽和の状態となつた場合には、更に僅にても温度が下ると、其水分は水蒸氣として存在する事が出来ず、忽ち冷却し凝結して液体の水となつて、粒だつて、冷くさへあらば何處此處の差別がなくとまつて居る、之を名けて露といふ……こぼれ落ちたら固より同じ普通の水に相違ないが。

夏の夕暮に、稻田の畔に蹲つて、稻葉の末に仔細に注目すると、些やかな露の粒が葉の全面に點々とついで居る、之を葉の面の細毛がぼち／＼反撥する、其度毎に小粒が次第／＼にはね上げられ相合して、最尖端に一粒となつて止まつて居る、

月の光にキラ／＼と宛ながら銀珠のやうで、そよ吹く風に誘はれて、稻葉そよげば、忽ち轉けて、チリン／＼と鳴り渡る。

月に誘はれ星にあてがれて、留るとはなしに納涼臺で、衣も何時しか濕うて來る、全体もだるくなる、盆の菓子さへしめつげくなる。

忠勇なる兵隊は、蒼天井の下、草を枕に、前途の成功を夢みつゝ、夜露のうつがまゝにして眠つて居つた、近時は各自風呂敷大の天幕を携帶して居つて、必要の際には相持ち寄りて一大天幕を張つて、幾分か凌ぎ易き露營をやるさうだ。

如何に豪氣な勇將でも、負ひし重傷には打勝てず、逆は鮮血に草葉の露を唐紅に染めなして、露より脆く消え果てた其古戰場で、今は萩や尾花の間に松蟲鈴蟲など露に唧きて、露命をつないで居

る、晝の最中でも。

露は元來熱帶地方や山嶽に多い、温帶地方で春にも秋にもあれど、夏の晴朗の夜のひき明けの所謂朝露が最も面白い。

手水がやつと終つて、楊枝と手拭と握つたまゝで、荒園にとび出て見る、草も樹も高さも低さもぼと／＼緑も滴りさうである、昨日の日中に萎れかゝつた向日葵も今朝は全く別人の如く張りきつて居る、雨蛙が其葉の表に丸まつて未だやすんで居る、我足下にぼつと音して今咲いた朝顔に、見る／＼露にぬれ脚の花蜂が駆け込んで、試に楊枝の柄尻で後から花筒を蓋してみると、蜂は喫驚くり逆戻り、慌て、手を引く其途端、脇が後の梧桐の可なりの幹にコツツリコ、御蔭で露を頭から。村の牛飼童は、早や垣根を過ぎて歸り行く、背

負へる草刈籠の緑滴る千草の中に、あはれ幾その露を刈り入れしをだらふ。

學校通ひの腕白連も風呂敷包を片腋に、船蟲然たる草履にて、幾萬粒の露踏み破り、揚々乎として通過ぐる。

頓がて隣の尋常一年生、蓮の葉を丸めて其未を握つて大事さうにさし出しつやつて來た、我泉水に預かつて呉れといふ、何であるやらつゆ知らず受けて見る、成程大きな露が唯一粒、中にゴロゴロゴロツイテ居る、其唯一粒の又中に、丁斑魚の兒どもが確に一匹、鱗チラ〜と肝處乃公の住宅と得意になつて、口をへの字に威張りかへつて泳いで居た。

はちす葉の濁りにしまぬ心もて
何かは露を玉とあざむく

私立東洋幼稚園の創立

嘗て、岸邊福雄君と遭ひし時、君は幼稚園設立、幼兒保育のことに付きて、熱心に語られ、余も亦君の如き有爲の教育家にして、眞實、斯道の爲に盡されんには、如何ばかり社會の爲め、人の爲めならんなど談し合ひたることありしが、近頃に至りて、君は一書を贈りて、愈々かねての企圖を實施したりと報じ、併せて同園の規則書を贈りしぬ、ここに、君か幼兒教養の主義として記載する所を紹介すべし。

私立東洋幼稚園教養主義

本邦に幼稚園が創設せられてから已に三十年になりますに、左程進歩せぬ様に見受られますが、凡事は云うは易くても行ふは難しで、いづれ其方針を定め、其方法を考ふるか、第一着ではあり

しようが、其効果を十分にあげることは、運用者其人にあると考えられます、然るに、理論に明かなるものは實際に暗く、實際に巧みなものは理論に通じないのを常としますから、原理と實際との程よい調和を見ないのか、我が幼児教育不進歩の原因であらうと察せられます。不敏ながら小生は、元來子供好きの性分でありまして、夙に身を兒童教育に投じ、兵庫縣、東京府師範學校などで、前後十余年間、子供の教育に従事しました、其間専ら遊戯法の研究に志し、兒童と一しよに、日々楽しく遊び戯れましたが、長年月の間には、自然得るところがあつて愈々其興味が忘れ難くなりましたから、更に一步を進めて、幼児教育を自分の天職と信任して、一生涯の道のために盡さうと思ひたち、遂

に茲に此幼稚園を創立した次第であります。(中略)
 本園は、斯く體育を主として居ますから、其教養は全然遊戯によるのであります、尤もこれを細別しますれば、遊嬉、唱歌、談話、手技の四つになりますか、要するに、歌を歌はせるも、話を聞かせるも、恩物を取扱はせるも、全く遊戯的でありますから、何事も幼兒の氣の向くがまゝにさせつゝ、其間に良き感化と正しき仕附けとを與えまして、少しも束縛する様な事はありませぬ。
 此主義は、廣大な運動場を持つてこそ、初めて十分に其目的も達せらるゝのでありますか、市内では到底遂げ難い望と存じ、こゝに新に幼兒運動用の馬車を拵えたのであります。此車で、

毎日或は公園に或は郊外に子供を連れ出しますから眺めは廣く空氣は清きあたりで、爛熳たる花の下、馥郁たる香の中で鳥や蝶を友として、共に楽しく歌い舞うと云ふ有様で、眞に自然の樂天地に遊ぶ事が出来ますから幼稚園教育の本意にも適うことと信じます。

しかし、幾ら方針を確定し方法を考究しましても、之れを實際に施すに、教師其人を得ませぬと到底教養の實効をあげる事は望まれませぬから、本園では保母の撰擇には最も留意しまして、愛情の深い子供好きで、氣質が正しく快活で、身體も亦健全の上に、相當の學識もあり、多年の經驗ある婦人を聘用して居ります。そして、園主自らはよしや彼の國のベスタロッヂやフロエベル氏には及ばずとも、唯、誠意之れを學

んで、一生を幼兒教育の道に捧げんことを誓うのであります。

尙ほ當園の實況は他日時を得て參觀の上報導すべし。

幼兒期に於ける遊戯は無意味なる消閑の戯にあらずして深き意味を有す、されば母なる人よ、よく之を培養せよ、父なる人よ、よく之を愛護せよ

フロエベル